Diploma Programme
Programme du diplôme
Programa del Diploma

Japanese A: literature – Higher level – Paper 1
Japonais A : littérature – Niveau supérieur – Épreuve 1
Japonés A: literatura – Nivel superior – Prueba 1

Wednesday 4 May 2016 (afternoon)
Mercredi 4 mai 2016 (après-midi)
Miércoles 4 de mayo de 2016 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

Instructions to candidates

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

Instructions destinées aux candidats

- N’ouvrez pas cette épreuve avant d’y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d’examen est de **[20 points]**.

Instrucciones para los alumnos

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

2216 – 0113
© International Baccalaureate Organization 2016

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

https://xtremepape.rs/

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選んで文学論評を書きなさい。

1.

1
黒ずんだ雪は、何処からその黒を集めてきたのか。

2
粗目状になって固まった雪の表面を見ると、小さなレンズが夥(おびただ)しく蝟集(いしゅう)[1]したように濡れた光を溜めている。柘榴(ざくろ)や葡萄の粒を連想しながら、一つ一つの水泡に浮かぶ円錐形の光を見ていて、春が近づいてきたのかも知れないと思う。

3
もう恋などしないと思っていたのに。もう人殺しなどしないと思っていたのに。もう奇蹟など見ないと思っていたのに——。

4
耳を澄ますと、硬い雪が日差しに染み溶けていく音が聞こえる。蚕が一心に桑の葉を食べているような音が、あそこのブナの木々といい、表面の煤(すす)けた雪といい、枯草の腐れ倒れた土が露出した斜面といい、あらゆる所から聞こえてくる。
それとも、古い民家の養蚕小屋で、自分はまったく未知の山奥に迷い込んだ夢を見ているのかも知れない。

5
行き付けの呑み屋では、小説の話などしたことがない。生まれ故郷の雪の話もしたことがない。愛人の話もしたことがない。奇蹟についても話したことがない。ただ、小学校に上がったばかりの子供が可愛いということと、ロックの話。
だが、ロックは本当は好きじゃない。それでも、午前三時くらいまでいて、宵っ張りの仲間達の話から逸(そ)れ、カウンターの上を這いまわるチャバネゴキブリが、焼酎グラスの中に膨れ上がって過ぎるのを見ている。

6
まだ凛冽(りんれつ)[2]とした空気の中に、ふと頬を掠める感触の違う空気の層を覚え、顔を上げれば、ブナ林の上にナイルブルー色の空があって、眩暈を感じる。

https://xtremepape.rs/

スクリューが引き摺（ず）る流れのような、捩（よ）じれた春の空気の紛れに、子供の頃は、獣のように体の奥がフツフツと沸騰してきたのに、むしろ、膿（う）んだものを感じて、疲れるのか、寂しいのか。

7

残雪の黒い汚れも、おそらくは、事実なのだ。何も起こらない事実と、すべてが起きうる事実。まったく変わりのない両極の間で、何を求めている？〈中略〉

16

光の残像が、小さな鉛色の塊になって斜めに上がっていく。

瞬き、消え、瞬きする光の明滅に目を凝らし、近づいていって、自分の肩ほどの高さにある枝先を見入った。

雫。

繊細な枯枝に残った雨氷が溶けて、重力を溜めて、震えている。恐ろしく冷たく、純度の高い雫の一粒が、今、まったく見知らぬ土地の、山奥の、雑木林の中に開いた、誰にも知られぬ枝先で、生まれていた。

何処にでもあることだが、一体、この宇宙を凝縮させ、ひっくり返して溜めている雫のあり方は、何なのかと思う。

黒曜石のように輝いて反転したむこうの風景に、自分の見てきたものがすべて含まれている気がして、茫然と立ち尽くしているうちにも、危うく、雫の中に入り込みそうになる。あまりにも膨大で、だが、微細な雫の中で、自分という現象が震えていた。

17

「……一緒に、死んでくれるか？」

18

わたしを見逃してください、主よ。

と、雫がいい、世界はただ存るがままで、奇蹟のようで。

藤沢周『わたしを見逃してください、主よ』（二〇〇三）

---

1 蝟集した：はりねずみの毛のように、多く集まること。

2 凛冽：寒気がきびしい様子。

https://xtremepape.rs/

鳥　四章

鳥が夢をみた。
いつおわるともしれぬ
ながいながい夢をみた。
いつまでたっても
飛びたてぬ、
飛びたとうと
羽ばたいて
けんめいに走るのだが
いつまでたっても
土の上を走っている、
砂をけちらし
水たまりにふみこみ
なりふりかまわず走るのだが
いつまでたっても
土から離れられぬ――
にがいにがい夢をみた。

ねむっても
ねむっても
鳥は空にいた。
めざめても
めざめても
鳥は空にいた。
いつも
いつものとおり
風に支えられて
鳥は空にいた。
土や水からは遠いところを
いつも
いつものとおり
飛んでいた。

https://xtremepape.rs/

曇った空を
飛んでいると
よく知っているつもりの
遠い国のことがわからなくなる。
遠く流れる流木のこともわからなくなる。
乾いた半分と
濡れた半分と
そのどちらの半分も
わからないものになる。
遠い町の生垣のことも。
遠い空のことも。
遠い心のことも。
わからなくなった
あげくのはて
私は曇った鏡のなかに
飛んでいる。

もちろん
銃弾が
私を地におとすかもしれない。
もちろん
疲れと潮風が
私を海におとすかもしれない。
もちろん
習性と季節が
私に帰郷を強いるかもしれない。
だが
もちろんのこと
私はおまえに向って飛ぶ。
ただあることのみが
うなずける
おまえに向って飛ぶばかりだ。

安水稔和『鳥』(一九五八)

https://xtremepape.rs/